

地獄（人生学 第10回）

高 橋 清 隆

はじめに

ものものしい題名になってしまいましたが、前回扱った立花隆さんの『臨死体験』（上下2巻、文藝春秋、1994年9月20日。初出は、『文藝春秋』1991年8月号～1994年4月号）の中の、第十章「色を聴く」の後半部に、ハワード・ストームさんの臨死体験の実例が出てきます。前回も、バーバラ・ハリスさんの臨死体験のところで参考のため、少し触れましたが、今回は、その「地獄」のような部分を中心に考察したいと思います。

また、以前、ブッタ関連で、地獄について扱ったことがあります、それとは様子がだいぶ違っていています。

1 ハワード・ストームさんの紹介

ハワード・ストームさんを紹介するため、しばらくそのまま引用します。

ハワード・ストームというノーザン・ケンタッキー大学の芸術学部の主任教授をしている画家の例である。六年前、パリに滞在して絵の修業をしているときに彼の体験は起きた。彼の体験を要約して示してみる。（原文は一行アキ）

そのころ私は、完全な物質主義者で、無神論者でした。神とか、魂とか、そういうものは一切信じていませんでした。真理はすべて科学によって与えられると信じていました。非科学的なものは一切認めませんでした。何か信じているものがあるとしたら、それは自分だけでした。私は完全な自己中心主義者で、私以外のことに対しては、本質的に何も関心がありませんでした。妻に対して求めていたことは、私に常に服従すること、そして、世間的によき妻としてふるまうということだけでした。妻を人間として扱っていたとはいえません。物みたいにみなしていたのです。子供にしたら同じことです。独立した人格を認めず、私の自我の延長としか見ていませんでした。私の望みは世俗的な成功でした。有名な画家になり、町を歩くと、私を見る人たちがみんな、「あれが有名な画家のハワード・ストームだ」とささやき合う、そういう人になりたいと思っていました。経済的にも成功し、大金持ちになり、社会的地位を持って大きな社会的影響力を持ちたい。その目的を達するために、他人は徹底的に利用すべきだと考えていました。自分以外の人間は利用の対象でしかなかったのです。

（319～320ページ）

ここに、その後、ハワード・ストームさんが、臨死体験で通る道の鍵が隠されています。
そして、パリで、十二指腸に穴があいて、死に近いことを予感します。そして、臨死体験をすることになるのです。

2 ハワード・ストームさんの臨死体験初期段階

ハワード・ストームさんの臨死体験を、まずは順を追って見ていきたいと思います。

次の日までとはとてももたないと思い、死を覚悟しました。そのころ私は、死はただの無だと思っていました。肉体という生化学的システムがその働きをやめることが死で、それとともに、人間の自我は消滅すると思っていました。間近に迫った死に対して悪あがきするのはやめようと思いました。そばにつきそっていた妻に、「もう、さよならだ」といって、目をつぶると、そのまま気を失ってしまいました。(320ページ)

本来なら、ここで人生は終わり、思考も途切れるはずなのですが、ハワード・ストームさんには思ってもみなかったことが起こります。

どれくらい気を失っていたのかよくわかりませんが、ふと目をさますと、私は自分のベッドのわきに立っており、ベッドの上には私が寝ていました。とても信じられないことでした。私は不愉快でした。死後の世界なんてあるはずがないと思っていたのに、こんなことになるなんて、この私は何なのだと思いました。見ることができ、音を聞くことができ、足が床を踏んでいる感覚もありました。ベッドの上の自分に手をのばしてみると、ちゃんと触覚もありました。(321ページ)

死後の世界などないと思っている人が、このような体験をすると、大変な驚きでしょう。本当は何度も死んで生まれ変わっているはずなのですが、死んだばかりの頃は、まだ直前の肉体にいた時のことしか頭にありません。例えば、何らかの事故で片足を失った人は、肉体から離れてしばらくの間は、片方の足がないという感覚を持続けることもあると言われます。

悲惨なのは自殺した場合です。

自殺する人は、死んで消えてなくなると思って、自殺するようです。

あの世があると思って自殺する人もいるようですが、自殺しても問題は解決するどころか、次の生まれ変わりでの宿題が増えてしまうため、本当に人生を理解している人は自殺しません。

自殺した人は、死後も意識があるため、自殺に失敗したと思い、そこで何度も自殺を試みるようです。そのため、死にたいと思っている人がそこを通ると引き込まれて、自殺の名所になったりするわけです。

それはともかく、ここで興味深いのは、自分の肉体を、自分の体から抜けて触った感覚があると

ということです。

さらに引用してみます。

病室のにおいや空気の味わいの感覚もありました。感覚が全部そろっているのです。わけのわからなさに怒りがこみあげてきて、そこにいた妻に向かって、「これは何なんだ！ オレは気が狂いそうだ！」とわめきました。しかし妻は全く反応しませんでした。私がどんなに大きな声を出しても、返事をしません。私は妻が聞こえないふりをしているのだと思って、ますます腹を立てました。今度はそのわきにいた友人に向かって怒鳴ったのですが、やはり何の反応もありませんでした。

(321ページ)

においまでわかるというのは、前回に採り上げたバーバラ・ハリスさんの臨死体験でも見られました。

亡くなったばかりの人はハワード・ストームさんのような行動をとる人が多いようです。普通、ここに出てくる妻や友人のように、亡くなった人が大声を出したり、相手を叩いても感じないことが多いのですが、いわゆる靈感の強い人の中には、感じてしまう人もいます。また、乳幼児は、肉体から抜け出た人の存在を感じやすいとも言われます。また、動物もその気配を察して、鳴いたりほえたりすることがあるようです。

3 あの世までの風景

さて、ここから、ハワード・ストームさんは、この世を離れ、いわゆる地獄のようなところを通ることになります。その通路のようなところの風景はなぜ出来上がったのか、見ていくことにしたいと思います。先の引用の直後から引用します。妻や友人が何の反応も示さないところの後からです。

すると、部屋の外から私の名前を呼ぶ声が聞こえてきました。不思議なことに、それは英語でした。ここはフランスなのに変だなと思いながらドアのところまでいくと、見知らぬ人が何人もいて、「ついてこい」といわれました。外は一面の霧で、歩いていくうちに、どんどん濃くなって、ほとんど何も見えなくなりました。まるで、放送が終わったあとのテレビの画面のようでした。ものすごく長い距離を歩かされました。何十マイル歩いたかわかりません。「どこへ連れていくんだ」と何度も聞いたのですが、誰も教えてくれません。「そのうちわかるよ」、「どこだろうと、お前には関係ない」、「急げ！ もっと急げ！」というばかりです。そのうち、霧がどんどん深くなってきて、ついに真っ暗になってしまいました。私は不安になり、くたびれきっていたので、もうこれ以上歩くのはいやだといって立ち止まりました。

(321～322ページ)

臨死体験は、人により異なることも多いのですが、共通していることも多く見られるのは、立花隆さんの『臨死体験』で検証しているとおりです。トンネルのような所を通るとか、長い道を歩くというのは、比較的、見られることのようです。また、後に出てくるように、言葉は耳で聴くというよりテレパシーのようなものになるので、異国にいて臨死体験をしても、この体験のように、通じるようです。ハワード・ストームさんの場合、ここから、この世の場面をあとにするのであり、本人としては、まだ、英語・フランス語という区別を気にしているのです。

さて、それよりも重要なことは、ハワード・ストームさんがたどった道の様子です。こういう道を通ることになるのかと、あの世への道に不安を抱く人もあるかもしれませんが、この道は、その人が生きて来た道を反映しています。

まず、案内役ですが、ここでは「見知らぬ人が何人もいて」と述べられています。よくあるのは先に亡くなった祖父母や両親、友人などです。写真でしか見たことのない先祖様ということもあるようです。けれども、生前のハワード・ストームさんが、家族にとった態度はどのようなものだったのでしょうか。「妻に対して求めていたことは、私に常に服従すること、そして、世間的によき妻としてふるまうということだけでした。妻を人間として扱っていたとはいえません。物みたいにみなしていたのです。子供にしたって同じことです。独立した人格を認めず、私の自我の延長としか見ていませんでした」とあったように、ハワード・ストームさんは、家族には、精神的なつながりを求めていませんでした。両親や先祖との関係については触れられていませんが、あらわれた案内役を見ると、妻や子供への対応とあまり差がなかったように推測されます。案内役により、その人が、周囲の人にどのように接していたかの一端が知られるのです。

そして、ハワード・ストームさんが歩いた道も生前のことをよくあらわしています。一般に、あの世への道は、トンネルなど、ある程度は暗い道を通ることになるようなのですが、ハワード・ストームさんの場合は長すぎます。「一面の霧」がどんどん濃くなってきて、ついに真っ暗になってしまうのです。これが実はハワード・ストームさんが求めていた道だったのではないのでしょうか。ハワード・ストームさんが求めていたのは、世俗的な成功でした。しかし、世俗的な成功というのは果てしないのです。しかも、明るい道ではなく、どんどん暗くなっていくのです。「どこへ連れていくんだ」とハワード・ストームさんは何度も聞いたのですが、「そのうちわかるよ」「どこだろうと、お前には関係ない」「急げ！ もっと急げ！」と言われるだけなのです。単に、世俗的な成功にはきりが無い、という意味ではありません。その道は、無駄に長く、次第に暗くなっていくのです。それがわかっていたら、行く人などいないのですが、ハワード・ストームさんのように、この世だけがすべてだと思っている人は、その道をたどりがちになるのです。

4 大ゲンカ

さて、立ち止まったハワード・ストームさんの状況に変化が起こります。

すると、暗闇の中で、その見知らぬ人々が私をつかまえ、こづき、殴りかかってくるのです。私もやり返したので、大ゲンカになりました。敵はものすごく沢山いました。はじめは、せいぜい十人やそこらだろうと思っていたのですが、とんでもありません。何百人、何千人いたか暗闇でわかりません。次から次へ出てきて、私をいためつけるのです。爪や歯を使って、私の皮膚を切り裂いたり、噛みちぎったりするのです。一人が足に噛みつくと、もう一人は耳に噛みつき、もう一人は顔に爪をたてるという具合で、何人もが私に一度にとりつき、叩いても、けとばしても、追い払っても、次々に新しいやつがかかってくるのです。持てる力をふりしぼって、必死で戦い続けましたが、とうとう精も根もつきはてて、組み伏せられてしまいました。(322ページ)

ハワード・ストームさんを案内していた「見知らぬ人々」が攻撃をしはじめたのです。普通、案内役は、死者や臨死体験者を、このように攻撃してきたりはしません。こわい顔をすることはありますが、それは、お前はまだこちらに来るべきではないから帰りなさい、という場合など、あまり多くはありません。

しかし、案内者たちは、ハワード・ストームさんに長く暗い道を歩かせたあげく、後戻りのきかない所で集団で攻撃しはじめたのです。

先には引用しませんが、ハワード・ストームさんは、「自分のことだけ考えろ」「この世は共食い社会だ」「やられる前にやれ」「人生に失敗したときは、死ねばいい」というアメリカの卑俗な処世訓どおりの生き方をしてきたと言っています。この中の、「共食い社会」や「やられる前にやれ」ということを実行してきたことが、ここに反映されているようです。この世でもあの世でも、意味なく攻撃されることはありません。また、このシリーズで何度も書いてきたように、罰として攻撃されるのではありません。自分のつくり上げた世界が実現しているだけなのです。生前実際に暴力を振るったかどうかはわかりませんが、ここで繰り広げられるのは、むしろ、精神的な戦いの様相を呈しています。「敵はものすごく沢山いました」と述べていますが、敵というのは、自分でつくり出していたのです。世の中の人々は、皆、蹴落とすべき敵と捉えて、批判したり引きずり下ろそうとしていたのではないのでしょうか。批判や悪口、陰口などは、自分で思うより、相手に影響を与えていることが多いのです。私たちは、あまりに安易にいろいろなことを批判しますが、批判される方に見れば、根拠のない批判でも受け取ることになり、時に被害が大きすぎることもあるのです。まして、ハワード・ストームさんのように、悪意のある批判をした場合、肉体的な暴力以上に、相手に打撃を与えることも少なくありません。

ハワード・ストームさんは、自分が想像していた以上に、多くの人に攻撃を加えていたということが、この臨死体験の描写から読み取れるのです。

5 祈り、そして天国と地獄

先の引用のような臨死体験から生還した人たちが、いわゆる地獄について、生き生きと語り、それが地獄像として定着してきたことがうかがわれます。

しかし、本来、地獄はありません。そして、一般に言われるような天国もないのですが、どちらかと言えば、あの世は、一般的な印象としては、天国に近いものかもしれません。

ハワード・ストームさんの臨死体験は、大きな転換点を迎えます。

そのとき、不思議なことが起こりました。私の胸のあたりから、誰かの声が聞こえてきました。私の声ではありません。それが、「お祈りをしろ。神に祈れ」というのです。「とんでもない」、私は反撥しました。私は十代のときにキリスト教を捨て、それ以来ずっと積極的な無心論者でした。教会に行ったこともありません。「私は神を信じていないのだから、神に祈るわけにはいかない」といって拒否しました。しかし、もう一度「神に祈れ」という声がしました。私は再び拒否しました。すると、もう一度「神に祈れ」と同じ声が聞こえてきました。とうとう根負けして、神に祈ろうとしましたが、祈りの言葉がぜんぜん出てきません。それで仕方なく、アメリカ国家と、国旗への忠誠の誓い（アメリカの学校ではさまざまな機会に、国家、国旗への忠誠の誓いを唱えさせるので、これはアメリカ人なら誰でも知っている）の中から、お祈りめいた部分を取り出して、それを唱えてみました。すると、私を取りおさえていた見知らぬ連中があわてふためき、「神なんていないのだから、お祈りしても誰も聞かないぞ」といい、さらに悪罵のかぎりをつくして、私にそれを唱えさせるのをやめさせようとしてしました。それが思いがけない効果を持ったので、私は思い出すかぎりの祈りめいた言葉を並べました。すると、いつの間にか連中はいなくなって、私は暗黒の中に一人取り残されていました。

(322～323ページ)

宗教を信じていない人にとって、祈りは抵抗があるものでしょう。けれども、宗教を信じているか否かにかかわらず、祈りにはある程度の力があります。自分が望んだように人生はつくられていくので、祈りは実現する方向へと行くのです。もちろん、欲望が何でもかんでもかなえられるわけではなく、自分自身への教育上、必要な方向へと私たちは向かっていくというのが大前提ですが、そこにおいて、ある程度の祈りは実現していく力があるのです。

ここでも、事態が行き詰まってしまったハワード・ストームさんに、祈るよう、指導の言葉がもたらされます。さすがに抵抗しますが、そしてまた、祈りの言葉も出てきにくいのですが、「お祈りめいた部分」でも唱えると、意外な効果があるのです。どのような言葉が効果的だったか、具体的に書いてくれていると有難いのですが、ある程度推測することはできます。それは、生前の自分の考え方とは違う方向の言葉です。すなわち、国家や国旗のために、自分のやれることをやる、他の人のために何かをしてあげるとい言葉です。国家や国旗についてはともかく、それも含めて、自分のためだけに生きるのではなく、他人のために何かをするということが、攻撃を加え

ていた者たちを退散させる力になったということなのです。

しかし、そのあとに、思ってもみなかったことになるのです。

たった一人で、そこに横たわっているうちにだんだん不安になり心細くなり、あのいやな連中でもいいから戻ってきてほしいと思うようになりました。しかし、誰も来ません。私は全くの孤独の中で、絶望感に身をさいなまれました。気持ちがどんどん落ちこんでいきました。

(323ページ)

「あのいやな連中でもいいから戻ってきてほしい」というのは、意外な言葉です。そういう「連中」を追いかけるために祈ったはずですが、祈ったおかげで、さらに良くない事態を招いてしまったかのように見えます。

しかし、実は、ハワード・ストームさんが、生前、人生を賭けて追い求めていた最高の世界は、「全くの孤独」の世界だったのです。それが、ハワード・ストームさんが求めていた「天国」だったのです。めでたく、ハワード・ストームさんは天国にたどり着いたのです。ところが、それは、地獄そのものでした。

これは皮肉でも罰でもありません。「他人は徹底的に利用すべきだと考えていました。自分以外の人間は利用の対象でしかなかったのです」と先の引用にありました。つまり、ハワード・ストームさんは、他の人は本質的に必要でないと考えていたのです。それが完璧に実現したわけです。

このように、私たちが、この世で考える天国は、とても幼稚なことが多いのです。幼稚ならまだしも、実は地獄をつくるために一生懸命がんばっていた、ということがわりに多いようなのです。

例えば、異性にもてたいと思う人は少なくないでしょう。

あの世に行くと、確かに、初めはもてて、天国のようなのです。ところが、ずっともてて、本当におもしろいでしょうか。

そしてさらに、あの世では、自分と同じような人ばかりいる村に住むことになります。

それについては、このシリーズで以前書いたので、ここでは詳しくは繰り返しません、愛し合えない地獄の村なのです。

ハワード・ストームさんが求めていたのは、全くの孤独だったというのは、衝撃的ではありますが、自己中心的な人が求めているのは、結局は、自分だけがいる世界なのです。自分が良ければいいという考え方は、自分一人しかいない世界をつくってしまう、もっとも愚かしい考え方なのです。

それでは、仲間も入れて、自分と仲間だけが良ければいいというのなら良いのでしょうか。

残念ながら、それも、ハワード・ストームさんがつくり上げた世界とたいして変わりません。

極端な宗教にのめり込んだ人たちは、あの世に行ってもその人たちだけで宗教的な儀式を延々繰り返しているそうです。孤独も辛いですが、そういう世界も一人一人ばらばらです。なぜなら、それぞれの宗教という密室にいて、仲間でさえ受け入れていないからです。しかも、そういう存在が寄り集まると狂気が増幅されてしまいます。また、別の宗教や集団に対して、敵意や憎悪も生じさ

せ、むしろ、孤独よりも地獄なのかもしれません。

ともあれ、ハワード・ストームさんは、理屈ではなく、身をもって、自分がつくってきた世界の至らなさを体験したのです。

6 闇と光

本稿の主旨から言えば、前節で終わってもいいのですが、人生の理解ということから言えば、その後のことも述べておいた方がいいと思われます。

前回と重複する部分もあるので、地獄との対比ということで考えてみたいと思います。

そのときなぜか、子供のとき日曜学校で習った「イエス様は私を愛し給う」という賛美歌のメロディがふと頭の中に浮かんできました。そのメロディに引きずられて、思わず、「イエスさま、助けて下さい」といいました。すると、闇の中、ずっと遠くの方に、小さな光の点が見え、それがどんどん明るくなってきました。やがて闇は消え、私はその光に包まれて、浮き上がり、どんどん上昇していきました。私の体は、暖かい水につかっているような感じで、とてもいい気持ちでした。あの暗闇の戦いで、私の体は全身傷だらけだったのですが、上昇をつづけている間に、その傷がみんな癒されてしまいました。どんどん上昇をつづけるとともに、上昇スピードがどんどん上がっていきほとんど光速になっていました。そのうち向こうのほうに沢山の星が見えてきました。しかし、さらに上ってゆくと、それが星ではなく、光り輝く命ある存在だということがわかりました。私たちはそっちのほうに向かっているのです。上昇をつづけながら、私の心はパワーで満たされ、愛に満たされました。それとともに、自分に対する恥ずかしさを感じました。それまでの自分があまりに利己的だったからです。何も信じなかったからです。いま私たちが向かっているのは、神がいるところなのだと思いますが、私は神を信じていなかったのです。これは間違いだ。私が属する場所は神のところではない。私が属しているのは、あの下界の暗闇の中だと思いました。しかし、上昇中の私を支えていた何者かが、「間違いではない。お前はたしかにこちらに属している」といいました。その存在が私にはかりしれないほど大きな愛情を持っていてくれるのがわかりました。それが嬉しくて、私は思わず声をあげて泣いてしまいました。私は大人になってから泣いたことはほとんどありません。しかし、このときばかりは泣いて泣いて泣きつづけました。

(323～324ページ)

私たちは、闇というと地獄、光というと天国を思い起こします。けれども、先のところで、本当は地獄や天国というのは存在せず、自分がつくったところに行くということがわかりました。それでも、そこに行きっぱなしではありません。闇は、実は、無知なのです。

仏教で「無明」(むみょう)という言葉があります。煩惱におおわれて、光が見えない状態のことです。

本来、すべては光なのです。光に満ちあふれているのです。

ところが、私たちの無知が、光を覆い隠してしまうのです。思い込みが物を見えなくしてしまうのです。他の人のために自分の力を使うのはもったいない、自分の力は自分が成功をおさめるために使うのだ、というのはその典型です。成功というのは、孤独だったり狂気だったり闘争だったりするのが見えていないのです。

私たちのあの世もこの世も含めたすべての世界の本質はあたたかな光です。ハワード・ストームさんのような、つくり方のへただった人も、「お前はたしかにこちらに属している」と言われるのです。

星のような存在に近づいたところで、私と私を支えている何者かは止まりました。すると、その星のような存在が集まってきて、私たちを取り囲むようにしました。私たちはお互いに挨拶を交わしました。声は必要なく、テレパシーで語りあいました。はじめに、私の人生回顧がはじまりました。私が生まれたときから、今日までの全人生が、順番にたどられていくのです。私がしてきた利己的な行為、それにたまにした親切な行為が次々に示され、評価されました。彼らの評価を聞いてみると、彼らが何よりも大切にするのは、人間と人間の間の人間らしい関係だということがわかりました。他人に対して、尊敬心と愛情と共感をもった人間関係を作ることが大切なんです。そういう視点から見ると、私の人生は完全に落第でした。（324ページ）

このような評価は、「他人は徹底的に利用すべきだと考えていました。自分以外の人間は利用の対象でしかなかったのです」と考えていたハワード・ストームさんだけに当てはまる評価ではありません。「他人に対して、尊敬心と愛情と共感をもった人間関係を作ること」は、すべての人がこの世に生まれる時に持ってきた課題です。

私たちは、自分の利益、自分の仲間だけの利益を考えがちですが、それでは落第です。どのように落第かは、それぞれの人が身をもって体験することになるのです。

私たちは、自分が尊敬されること、自分が愛情を受けること、自分が共感されることばかり求めています。けれども、私たちがやったほうがいいのは、その逆のことなのです。そして、他人に対して、尊敬心を持ち、愛情を与え、共感を持つと、自然とそれらが得られるようになるのです。中には、他人を尊敬すると、自分が低くなったように思うような歪んだ人もいます。しかし、自分は偉い、自分は頭が良い、自分は身分が高いなどという言動をしているとどうなるかは子供でもわかります。いろいろ歪んだものを抱えながらも、物事の本質を見極め、自分がつくり上げている世界は本当に天国に近いものなのか、時々視点を変えて考え直してみることは時には必要なのだと思います。

課題のない人は、この世にはもう生まれてきません。

課題があるからこそ、わざわざ生まれてくるのです。

自分が完璧だと思っている人は、あの世もこの世も含めたこの世界の仕組みをよく理解していな

い人です。ハワード・ストームさんは、先の引用の後の部分で、「知ることより実践することが大切だ、愛を知ったら、愛せ、善を知ったら、善をなせ」(324ページ)と言われます。

地上に生まれてくる意味は、実践です。理論や理屈をいくら知っていても、それだけではたいしたことはないのです。それを実践できるようになって初めてそれらを身につけたと言えるのです。

大切なのは、愛の知識ではなく、愛の実践なのです。